様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：１３６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２１０３

研究課題名（和文）音楽と文学における虚構理論の美学的関連性の検証

研究課題名（英文）Verification of aesthetic relevance of fictional theory in music and literature.

研究代表者
小野　貴史（Ono, Takashi）

信州大学・学術研究院教育学系・准教授

研究者番号：１０３６２０８９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：　研究成果は以下の2つである。①音楽と文学における虚構性の共通構造と差異、②文化的コンテクストにおける虚構性受容構造分析。
　音楽は作為的時間の作出／表出を基盤に置き、言語芸術におけるプロットと類似した構造を有している。この構造的類似性から、音楽作品を《虚構》とする共通的構造側面に到達した。対して音楽と文学の受容過程で《語り手》と《代理話者》で構造的差異が観測できた。続いてフィクションとしての芸術の受容には、その作品が成立する文化的コンテクストが大きく作用する点を、明治期の小説におけるヴァーグナーの架空の受容、戦後の前衛音楽の衰退とポストモダン終焉にともなう現象を実例をもとに分析した。

研究成果の概要（英文）：　The outcome of this research can be broadly divided into the following two categories. ① Common and difference structure of fictionality in music and literature, ② research on fictionality acceptance structure in cultural context.
Music art is based on the creation / expression of artistic time, which has a structure similar to "plot" in language art. Focusing on this structural similarity, this research has reached a common structural aspect which makes music work "fiction". However, we discovered a new problem that the greatest structural difference in the acceptance process of music works and literary works is the position of "Narrator" and "Substitute Speaker".
Subsequently, in accepting artworks as fiction, we analyzed the cultural context . And we analyzed the cultural context. Such as the acceptance of fictional acceptance of Wagner in the novel of the Meiji era, the decline of avant - garde music after the war and the end of post - modern.

研究分野：作曲、音楽理論、音楽美学

キーワード：虚構理論　音楽美学　文学理論　アヴァンギャルド　ポストモダン　文化的コンテクスト　作品受容構造

１．研究開始当初の背景

音楽芸術と文学芸術とのかかわりは大きい。ともに他筆的芸術であり聴き手／読者なくして作品は存在しえない特徴を共有している。しかし、虚構（フィクション）という作品の構成要素を切り口にした場合、美学理論上両者は大きく離れてしまう。

“虚構（Fiction）”とは、事実でないものを事実らしく創作することを意味するが、文学用語的に定義するならば、架空の出来事を想像的に描く行為をさす。三浦俊彦は虚構世界の存在を、それが持つ不完全性によるものと定義している（『虚構世界の存在論』、2007）。三浦はローマン・インガルデンの音楽美学を援用しつつ、虚構対象が芸術の場合、芸術作品が集合的普遍であって鑑賞者は現実の美的経験において作品図式の不確定箇所を充填し、具体化しつつ特定の表象を抱く、と説明している。

虚構の定義は哲学や論理学的命題としてこれまで様々な学説が提唱されてきた。また、文学作品における虚構の研究でもケンダル・ウォルトンの「メイクビリーブ説＝ごっこ遊び」やジェラール・ジュネットによる研究（“Fiction et diction”、1991、“The Work of Art”、1994）等、数多くの研究例を挙げることができる。

文学理論における虚構研究がこれほど進んでいるにもかかわらず、音楽の虚構性に言及した先行研究はほとんど進んでいない。たとえば佐々木健一は「作品の虚構性を決定する要因は、作中人物の行動、プロットにある」という前提のもと、「虚構作品と見做され、そう呼ばれるのは叙事詩、小説、演劇、映画など、行動の展開としてのプロットを含む芸術ジャンルに限られる。プロットを含まない絵画、彫刻、音楽などは、虚構と呼ばないのが普通である。」と記述している（『美学辞典』、2004）。また、先述したケンダル・ウォルトンは“Mimesis as Make - Believe”（1990）で、音楽の虚構性をある程度認めながらも（たとえば表題音楽等）、絵画等の視覚芸術と比較して、音楽は多くの場合絶対的事象で、その聴取は個人的経験であり「メイクビリーブ」は成立し難いという結論を出している。しかし、ウォルトンの説明は“聴き手”としてのベクトルに傾斜しており、“作り手”のベクトルも含めた双方向的な存在様態を示したものではない。また、1997 年に『コンテンポラリー・ミュージック・レヴュー』誌上でシンシア・M・グルンドは音楽の持つメタファー、シンボリズム、フレーム構造の観点から「音楽表徴の研究で虚構性の概念は無視されている」と批判している。

２．研究の目的

音楽／文学双方に言及する美学・様相哲学領域でも、音楽における虚構性にはこれまでほとんど触れられてきていない。このように、未だ音楽作品に虚構性を認める研究が乏しいのが現状である。研究代表者（小野）はこれらの先行研究を踏まえつつ、音楽における時間概念に着目し、『音楽、あるいは虚構としての時間』（信州大学教育学部研究論集、第 6 号、pp.129-142、2013）という試論を発表したが、虚構性の研究が近年理論的支柱となっている文学理論との相補性を埋めるには至っていない。従って、本課題では音楽と文学理論を専門とする研究者による共同研究をとおして、より精緻な理論的統合を目指した。研究目的としては、虚構性に関する音楽研究と文学研究の協同理論を構築し、その観点から文学理論を援用した音楽表象の分析・検証をおこなう。特に、“虚構性”と“作品の受容構造”に焦点を絞り、諸芸術作品における時間性と文学作品内で音楽体験が言語化される諸相等を取り上げ、芸術性の生成・受容場面で、言葉と音の相補性に焦点を絞った。

３．研究の方法

音楽芸術における虚構理論の適用概念を、言語芸術によるフィクション論を横断的に援用しつつ理論証明し、確立する。言語芸術作品の中に引用される音楽作品は多い。音楽における虚構性を肯定する立場からすれば、メタ・フィクションとも呼べる引用の行為を、文学理論を専門とする研究分担者の山本は「実際の世界で文字通り＜再現＞可能な音楽作品の存在が、虚構世界（小説世界）への読者の直接的な接触の仮想を具体化している」（『エコ・フィロソフィ研究』第 8 号、pp.21-32、 2014）と考察している。音楽作品は“作為”によって物理的時間軸上に音素材が配置された結果による産物であり、つまり架空の出来事（＝音楽）を想像的に描く行為（＝音素材の配置）である。物語（言語芸術）に関する時間論は、受容されるべき作品が“フィクション”であることを暗黙の前提としながら、あたかも現実の時間であるかのように読者が作品を受容するプロセスの上に成り立っている。この構造的差異に着目し、音楽と文学における作品受容の構造分析を行った。さらに派生的課題として、文化的コンテクストにおける受容の差異が課題となり、研究代表者・分担者それぞれが分析結果を論文として発表した。

４．研究成果

（1）音楽と文学における虚構性の共通構造と差異

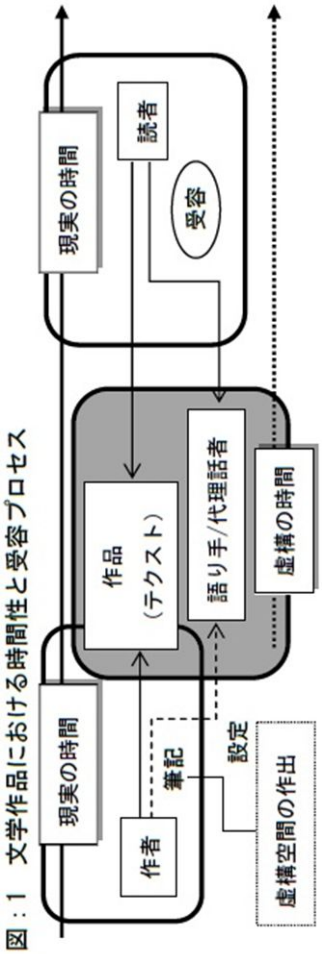
ジェラール・ジュネットは『芸術の作品』において音楽を文学同様に「他筆的体制」（Allographic Regime）とカテゴライズしている（Gérard Genette：“The Work of Art”、Cornell University Press1997、pp.73-81）。ジュネットは文学テクストを＜内在性＞＝文学テクスト；＜顕現＞＝語り・記述，音楽テクストにおける＜内在性 Immanence＞＝音楽テクスト；＜顕現 Manifestation＞＝演奏・楽譜，と簡潔に文学と音楽における他筆的関係性を

図示している（p.93）。

音楽芸術は作為的時間の作出／表出を基盤に置くが、これは言語芸術における「プロット」と類似した構造を有している。この構造的類似性に着目し、本研究は音楽作品を《虚構》とする立場をとった。

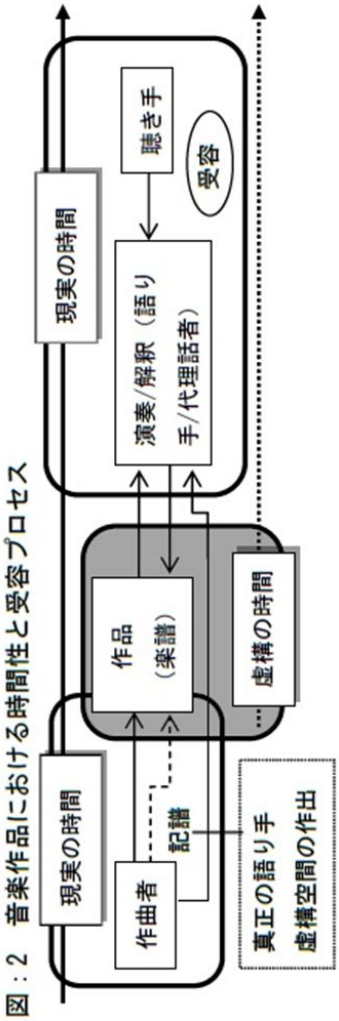
音楽作品と文学作品の受容過程において最も大きな構造的差異が生じているのが《語り手》と《代理話者》のポジションである。音楽芸術は作為的時間の作出／表出を基盤に置くが、これは言語芸術におけるプロットと類似した構造を有している。文学作品内では作者は架空の《語り手》を設定し、読者は《語り手》の語りを現実時間に聞く、という行為こそが読書であり読者がその作品を受容するか否かの決め手となる。少なくとも可能世界における虚構の時間上で展開される語りは、それが一人称であっても作者本人とは乖離した可能世界における存在となる。しかし、音楽作品は楽譜を再現する《演奏者》という代入因子が介在することによって、虚構の時間が再び現実の時間へと引き戻される現象が起こる（文学作品は朗読者が不在でも作品そのものは成立する）。

以下に音楽と文学における構造的差異を図示する。文学作品における受容構造は虚構理論と芸術的時間性に従えば図：1 のような構造で成立している。



図：1　文学作品における時間性と受容プロセス

このように文学作品では《語り手》は虚構の時間軸上に常に存在するが、音楽における《演奏者》＝《語り手》は現実世界に存在している。音楽作品は楽譜を再現する《演奏者》という代入因子が介在することによって、虚構の時間が再び現実の時間へと引き戻される現象が起こる（文学作品は朗読者が不在でも作品そのものは成立する）。これが音楽＝虚構という構造を棄却する概念を形成していると思われる（図：2）。



図：2　音楽作品における時間性と受容プロセス

音楽作品では、演奏者を《語り手》もしくは《代理話者》と見立てると、音楽作品における虚構性はさらに複雑なものとなる。文学理論においてはマリー＝ロール・ライアンが『可能世界・人工知能・物語理論』（2006）で語り手と代理話者について詳細に整理論述している。なかでも代理話者（substitute speaker）を＜A＞心理的現実を提示する人格を持つ／個人化した語り手、＜B＞純理論的根拠によって存在が措定される無人格の語り手、と分類している点は極めて画期的である。このライアンの先行研究をもとにすると、音楽芸術における《語り手》及び《代理話者》の関係性では、音楽作品が他筆的芸術として成立するには作曲者と聴衆を結ぶ現実界に

属する代理(substitute)を代入するしかない。今後は音楽作品の受容に至るリアライズをパフォーミング・アートからの分析も含めつつ考察する必要性がある。

(2) 文化的コンテクストにおける虚構性受容構造の研究

音楽と文学における虚構性構造の研究を進めて行く上で、文化的コンテクスト／受容サイドの時代背景の側面も考慮に入れる必然性を感じた。

まず、研究分担者は森鷗外の初期作品から、明治期におけるリヒャルト・ヴァーグナーのオペラ／楽劇上演以前に「活字の上での受容を主とする特異なヴァーグナー・ブーム」という、文学作品の中で展開され架空の音楽受容、つまりジャンル／分野をまたいだメタ＝フィクション構造を発見した（山本、2018、p.86)。これを「音楽の不在あるいは歌われることのない歌詞」という小説に内在する音楽の存在論に結実させた。

また、研究代表者はフリー・ジャズ・ギタリスト高柳昌行のパフォーマンス“アクション・ダイレクト”を詳細に分析し、戦後日本における前衛の終焉構造を楽理的に読解した（小野、2016)。とりわけポストモダン以降の、日本における音楽文化は明確な“制度”ないし“規範”(＝スタンダードな基準）を喪失した。戦後の前衛においては崩壊させるべき既存の音楽語法はもはやその全てが攻撃され尽くし、前衛側から論争対象とされるべき“制度”は無力化し,“権威”は失墜した。ここに“前衛”は終わりを告げたのである。その終焉地点に、楽器の“正統的な”演奏を含む全ての“制度”に背を向けた最後の“前衛” である孤高のメタ・インプロヴィゼーション＝「アクション・ダイレクト」が位置しているという結論に達した。

さらに、ポストモダン文化～ゼロ年代を経て、終焉したかのように見えた“アヴァンギャルド”＝前衛が復権するまでの構図を、テクノロジーの発展を批判的に検証することによって論じた（小野、2017)。

ジャン=フランソワ・リオタールはポストモダン時代の高度情報化社会においてはメディアによる記号・象徴の大量消費が行われる、と予想している。一般にはこれが“ポストモダン”の始点と言われている（リオタール、『ポストモダンの条件』、1979)。ポストモダンにおける音楽文化はインターネットを含むテクノロジーの飛躍的進歩とともに歩んできた。全てが過去から解き放たれ、《一般化》を理想とする消費構造は音楽作品を著しく平準化させることとなり、もはや前衛の存在意義が失われた。つまりインターネットを含むデジタル・テクノロジーの進化と音楽文化における受容構造の変化は我々に恩恵をもたらすとともに、音楽を悪い意味で《一般化》する元凶ともなったのである。しかし、ポストモダンの最終到達点たるゼロ年代が終わり、音楽消費サイドがネットでヴァーチャルに音楽を享受するよりも、リアルに音楽が演奏される《場》を求めるようになった動きをデータ分析から発見した。今、ゼロ年代が語法。思想ともにシンプリシティの底辺＝バウンド地点であるような回帰現象を見ることができる。消費者は、何重にも仕掛けられたフィクションの愉楽から、リアリティを持つ“声”と“身体性”を再び希求するようになっているという結論に達した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　５　件）

①小野貴史、ポストモダンの終焉とネオ・アヴァンギャルドの時代－表現者としての戸川純から見る日本ポピュラー音楽受容構造の転換－、信州大学教育学部研究論集 11 号、2017、pp. 21-40、査読有

②山本亮介、「うたかたの記」における不在の音楽—初期鴎外の美学とヴァーグナー—、国際哲学研究　6 巻、2017、査読無、pp.97-110

③山本亮介、動物とロックンロール—古川日出男の想像力—、エコ・フィロソフィ研究第 8 号、2016、査読無、pp.11-22

④小野貴史、高柳昌行とアクション・ダイレクト—“前衛”の終焉—、信州大学教育学部研究論集　第 9 号、2016、査読有、pp.9-25

⑤依田翔、小野貴史、ポリリズムの類型における楽理的分析、信州大学教育学部研究論集第 9 号、2016、査読無、pp.169-188

〔学会発表〕（計　１７　件）

①小野貴史、音楽文化におけるポストモダンの終焉－音楽語法とテクノロジー両面からの考察－、音楽音響芸術研究 2014 年度研究会、2017 年 9 月 16 日、東洋大学白山校舎（東京都文京区）

②山本亮介、ジョナサン・スターン『聞こえてくる過去』を読む、音楽音響芸術研究 2014 年度研究会、2017 年 9 月 16 日、東洋大学白山校舎（東京都文京区）

③J.S. バッハ“アラ・ブレーヴェ”ニ長調 BWV.589（小野貴史；室内アンサンブル版編曲)、2017 年 8 月 2 日　Ensemble sans-limite 2017 定期公演　ティアラこうとう・小ホール（東京都江東区）

④A・シェーンベルク “ピアノ協奏曲”op.42（小野貴史；ピアノと室内アンサンブル版編曲)、2017 年 8 月 2 日　Ensemble sans-limite 2017 定期公演　ティアラこうとう・小ホール（東京都江東区）

⑤小野貴史、“Duo V”for Flute and Tenor Saxophone（作品発表)、2017 年 8 月 2 日 Ensemble sans-limite 2017 定期公演　ティアラこうとう・小ホール（東京都江東区）

⑥小野貴史、“Israeli’s Type ε”for Steel guitar, Percussion and Piano（作品発表)、2017 年 8 月 2 日　Ensemble sans-limite 2017 定期公演　ティアラこうとう・小ホール（東京都江東区）

⑦小野貴史、音楽作品における“語り手”と“代

理話者”、2016 年 9 月 18 日、音楽音響芸術研究 2016 年度研究大会、東洋大学白山校舎（東京都文京区）
⑧山本亮介、森鷗外における西洋音楽、2016 年 9 月 18 日、音楽音響芸術研究 2016 年度研究大会、東洋大学白山校舎（東京都文京区）
⑨小野貴史、“Traced Segments”for 7 Players and Live electronics（作品発表）、Ensemble sans-limite2016 定期公演、2016 年 8 月 5 日　ティアラこうとう・小ホール（東京都江東区）
⑩小野貴史、“Alley”for Piano（作品発表）、Ensemble sans-limite2016 定期公演、2016 年 8 月 5 日、ティアラこうとう・小ホール（東京都江東区）
⑪R・ワーグナー“トリスタンとイゾルデ”～前奏曲と愛の死（小野貴史；室内アンサンブル版編曲）、Ensemble sans-limite2016 定期公演、2016 年 8 月 5 日、ティアラこうとう・小ホール（東京都江東区）
⑫A・スクリャービン“焔に向かって”（小野貴史；室内アンサンブル版編曲）、Ensemble sans-limite2016 定期公演、2016 年 8 月 5 日　ティアラこうとう・小ホール（東京都江東区）
⑬小野貴史、アントン・ブルックナーの第 8 交響曲における 1890 年稿の比較研究、2015 年 9 月 19 日、音楽音響芸術研究 2015 年度研究大会、東洋大学白山校舎（東京都文京区）
⑭山本亮介、『マラルメと音楽　絶対音楽から象徴主義へ』（黒木朋興著）を読む、2015 年 9 月 19 日、音楽音響芸術研究 2015 年度研究大会、東洋大学白山校舎（東京都文京区）
⑮小野貴史、“Monologue”for Piano（作品発表）、Ensemble sans-limite 2015 定期公演、2015 年 8 月 7 日、ティアラこうとう・小ホール（東京都江東区）
⑯小野貴史、“Tele–Proxy Ⅰb”for any Keyboard Instruments（作品発表）、Ensemble sans-limite 2015 定期公演、2015 年 8 月 7 日、ティアラこうとう・小ホール（東京都江東区）
⑰W・F・バッハ“2 つのハープシコードのための協奏曲　ヘ長調　WF.10”（小野貴史；室内楽版編曲）、Ensemble sans-limite 2015 定期公演、2015 年 8 月 7 日、ティアラこうとう・小ホール（東京都江東区）

〔図書〕（計　1　件）
①山本亮介、小説は環流する: 漱石と鷗外、フィクションと音楽、水声社 、2018 年 3 月 30 日、全 274 頁　ISBN-10: 4801003281

６．研究組織
(1)研究代表者
小野　貴史　（ONO, Takashi）
信州大学・学術研究院教育学系・准教授
研究者番号：10362089

(2)研究分担者
山本　亮介　（YAMAMOTO, Ryosuke）
東洋大学・文学部・教授
研究者番号： 00339649